

平成19年度前期授業アンケートの分析とまとめ

外国語（ドイツ語・フランス語・中国語・朝鮮語・日本語・ポルトガル語グループ）

山 中 哲 夫（愛知教育大学外国語教育講座）

Tetsuo YAMANAKA（Department of Foreign Language, Aichi University of Education）

分析

主要と思われる設問について以下に報告する。

設問問1「この授業で、新しい考え方や知識・技能が身についたか」については「強くそう思う」「ややそう思う」合わせて76%の回答があった。問3の「この授業を意欲的に受講した」に対して否定的な回答は1割にも満たなかった。問9の授業の難易度については「ちょうどよい」と回答した者が最も多く58.7%あった。ただ難しいと回答した者も31.5%あり、内容や進行度に一考の余地があるかもしれない。しかし次の問10「一回当たりで扱われる授業内容の量」については「ちょうどいい」が80%近くあり、量よりも質に検討の余地があるかも知れない。問12「教員の授業時間の使い方」では「適切である」が86.9%にのぼった。問13の授業の準備、目的の説明、的確な指示を問う項目では、「強くそう思う」「ややそう思う」合わせて6割強の回答があった。問14「あなたは、この授業に毎回出席しましたか」については「ほとんど出席した」が90.3%の回答率であった。

まとめ

以上の結果から断定的なことは言えないが、概括すれば、語学について学生たちは概ね積極的に受講しており、教授する側もそれなりに工夫しながら成果を上げているように思われる。

8週目と14週目とでは、回答率にほとんど目立った差異は見られないが、出席率がやや落ちたことは否めない。後期になるにつれ文法などが急に難しくなるせいだろうが、これは今後の課題としたい。但し8週目の「この授業に何を求めましたか」にたいして、14週目の「実際にこの授業で何が得られましたか」の「専門の基礎」や「知的刺激」の回答率が上がっており、学生の期待以上の成果があったことを物語っている。それに対して「幅広い知識の習得」は若干下がっている。週一回一年のみという限られた授業時間ではグローバルな文化や知識の習得までは到底手が回らないのが実情である。